

日本貨幣史における銀

—問題提起—

鈴木 公雄

主旨

日本の錢貨流通において、金貨が登場してくる過程に比べ、銀(貨)が出現してくる事情については不明の点が多い。この問題を明らかにするには、日本中世史、近世史における記録のみならず、中国史、対外交渉史、鉱山史、考古学など、多方面の資料を総合的にとらえ、分析する必要がある。今回はその解明に向けて、一つの試案を提起し、多くの方々に検討の素材を提供することにしたい。

問題点

- 日本中世の錢による単貨体制に、銀はいつごろから、どのような形で関係してくるのか。
- 近世領国銀は、時期的にいつ頃まで遡れるか。領国銀は貨幣と呼べるか。
- 幕府の銀貨が丁銀、豆板銀という秤量貨幣の形態を取っていたのはなぜか。
- 17世紀の東国では、金貨と錢貨が関連付けられるのに対し、西国では銀と錢貨が結びつくのはなぜか。
- 上記の問題を、東西日本における金・銀・銅・鉛・鉄の産出量の差異に求める考えは妥当か。
- 中国において、銅錢使用から紙幣(鈔)使用へと移行するさい、鈔の価値を保証していたものはなにか(北宋末～明)。
- 上記のプロセスに銀はどのように関係するのか。
- 中国の銀需要はどの程度のものであったのか。またその供給ルートには、自国産を含めてどのようなものがあつたのか。
- 中国の銀需要を、日本産の銀はどこまで支えていたのか(15～16世紀)。
- 中国で「銀貨」が存在しない、という考え(地金である)は妥当か。そしてそれは日本の銀のあり方と関連するものなのか。
- 銀が東アジアで「国際通貨」としての機能を発揮しだすのはいつ頃からか。
- 新大陸の銀(貨)は、アジアでいつ頃から、どのように使用されたのか。
- イスラム世界の金・銀貨は、東アジア世界にどのような影響を与えたのか(与えなかったのか)。

これらの問題を整理し、いくつかのトピックにまとめてみると、以下のような形となる。

- (1) 中国から銅銭の流出が顕著となる14～16世紀前半ごろの東アジアにおいて、銅銭と銀および金の関係をどのようにとらえるか。
- (2) 中国がいわゆる「銀本位国」となる傾向を示しだしたのは、純粋に中国経済に固有の問題なのか、それともより広域の経済的交渉の結果と考えるべきなのか。
- (3) 東アジア全体が銀への依存を強める16～17世紀において、日本が金を貨幣として使用していこうとすることの意味と評価。

以上のまとめは、鈴木が試みに提示するものに過ぎない。これら以外にも注目すべき点が当然存在するはずである。それらについて討論をしていただいた上で、これらのトピックを改訂充実させ、それに基づいて次回以降の研究会を開催していくのはいかなものであろうか。出来ればその中からいくつかをまとめる形で、より大きな研究集会、検討会を開き、その成果を何らかの形の刊行物としてまとめていく方向を探っていきたいと考えている。